速報
kyodan-sokai sokuho
No.4
2016.10.27 13:00
第40回 日本基督教団総会
2016年10月25日（火）～27日（木）
†総会速報発行委員会 発行

常議員決まる

教団総会2日目午後、常議員選挙が選挙方法に関する議論の後、全数連記で行われ、次のように選出された。

【教師】

投票総数5082票、有効投票数4787票、無効投票数295票（内白票258票）

保科　隆……204票
藤掛順一……200票
高橋　潤……193票
岡村　恒……192票
真壁　巌……192票
宮本義弘……191票
横山良樹……191票
東野尚志……190票
大友英樹……188票
川﨑善三……188票
小橋孝一……188票
篠浦千史……184票
田中かおる……183票
松井　睦……165票

以下補充員
久世そらち……158票
邑原宗男……154票
後宮敬爾……149票
柴田もゆる……144票
深澤　奨……140票
大川　清……137票
井口智子……135票

【信徒】

投票総数4719票、有効投票数4375票、無効投票数344票（内白票309票）

望月克仁……201票
鈴木功男……199票
佐久間文雄……198票
稲松義人……195票
遠藤道雄……195票
野村敏彦……195票
奥山盾夫……190票
中嶌暁彦……190票
八嶋由里子……189票
中川義幸……189票
井田昌之……186票
物井惠一……185票
豊川昭夫……178票

以下補充員
藤巻朋子……149票
難波幸矢……146票
浅野直人……143票
東谷　誠……141票
駒木和男……141票
滝川英子……141票
野口菊義……132票

教団総幹事選任、出版局長承認

長崎哲夫総幹事が任期4年を終えて退任した。今期は、後任の総幹事が選任されるまで、道家紀一総務幹事が総幹事事務取扱となることを決定した。新総幹事の選任については今総会期常議員会に付託され、選任結果を41教団総会に報告、承認を受ける。

任期4年を終えた長崎哲夫総幹事

総幹事事務取扱となる道家紀一総務幹事

審議では、総幹事選任を上程したところで、石橋議長は本総会までに推薦すべき総幹事候補者を選任できなかったことを詫び、後任が決定するまで道家総務幹事に事務取扱として任に当たってもらうこと、早急に後任を選任することを述べた。しかし、これを巡って、議長が後任者を推薦する慣例について、議案上程後、議場に了解を取っていないとの意見が強く訴えられ、議長は、再度、慣例の了解を得て決定手続きを取った。本議案の採決では355名中215名の賛成を得た。

石橋議長は、特に任期中、東日本大震災救援、会館耐震補強工事に大きな働きをした長崎総幹事に謝辞を述べ、長崎総幹事は退任の辞を述べた。また、道家総幹事事務取扱が挨拶した。

★

竹澤知代志出版局長が4年の任期を終え退任した。新出版局長には常議員会が推薦した、新藤敦氏を承認した。新藤氏は、現在、出版局次長代行、経理課長代行であり、出版局内からのはじめての局長となる。竹澤局長、新藤新局長がそれぞれ挨拶に立った。

任期4年を終えた竹澤知代志出版局長

新出版局長となる新藤　敦氏

総会3日目の重要な議案

常議員選挙結果の報告承認の後に扱われた狭山事件即時再審開始案は、議案に加え提案者の東谷誠議員が、狭山事件の概要を説明し、「この事件は部落差別にもとづく冤罪事件であると思うが、本議案は、無実を訴えるものではなく、再審を求めるものである」ことを強調した。

議場からの反対意見は特になく、全会一致で可決した。

2017年度歳入歳出原予算案に先立って議論した伝道資金規則変更案は、現行の申請制ではなく配分制を求めることに重点が置かれたものであったが、「教区活動連帯金がどうして崩壊したかを忘れての議案ではなかろうか。伝道資金規則は、教憲・教規と教団信仰告白の一致にもとづく一方策として生まれ、伝道のニーズを掘り起こす目的を持ち、自動的に送り、保つような意図を掲げていない」との反対意見を皮切りに、重点以外のところにおいての条文変更に対しても質問が相次いだ。特に第3条の変更に関しては、現行規則よりも改訂案は、「北海教区負担金が増額となり、東京教区が減額となる」議案であることが確認された。

議案に賛成する中には、「常議員会によって決定される伝道資金運用指針ではなく、誰もが判断できるような規則とするように求める」、「この議案は、伝道資金がよりよいかたちとなり、改訂に改訂を重ねて行く姿勢を示している」との意見もあった。

議員総数351中、賛成130で少数否決となり、2017年度歳入歳出原予算案の審議へと入った。

聖 餐 礼 拝

「死の体からの救い」

岡村 恒牧師（大阪教会）による説教

総会3日目、午前8時30分から岡村恒牧師（大阪教会）の司式により聖餐礼拝が持たれた。「死の体からの救い」（ローマの信徒への手紙7章15～25節）と題して説教がなされた。

「パウロは25節で『神に感謝いたします』と語りかける。この直前までは、神の前で絶望のうめきを上げる人間の姿が記されている。パウロは命がけで律法を守ろうとし、自慢出来ることが沢山あった人である。しかし、17節で『そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです』と語っているように、神の前で生きることを突き詰めて、自分の責任をとことんまで自覚し、嘆いた。

この同じ嘆きを口にしたのがマルティン・ルターだった。彼は95箇条の第一の提題で神の前に生きる罪人の姿を『悔い改め』という一句で捉え、そこに初めて確かな救いを見出した。

私は30年余り前にルターの熱い信仰に触れたいと思い、ドイツを訪ねた。そこで必死に神の義を追い求め、あえぎ、ただひたすら聖書の御言葉に全身全霊をかけた彼を肌で感じた。

しかし、他の誰とも比べようもないほど最も深い絶望の叫びを上げた人がいる。それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』と十字架上で叫ばれた主イエスであった。彼は十字架の上で私たちに代わって叫んだ。罪無きお方が神に見捨てられ、一切の罪を背負った。その理由はただ一つ、私たちがこの絶望の叫びを叫ばなくてもよいようにである。だから、主イエスの十字架によって何が実現したのかを知る時、『わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします』（25節）と神の前で絶望の叫びを上げる全ての信仰者は叫び出すのである。

パウロは、過去の自分は絶望の中で留まり、滅んでいくべき人間だと受け止めていた。しかし、復活の主に出会ったダマスコ途上の出来事を思い出す度に、神に感謝を捧げ、賛美した。

11月第1日曜日は聖徒の日である。信仰の先達者は『主よ、来て下さい』と叫び続け、主イエスの再臨を待っており、兄弟姉妹と再会し、共に恵みの食卓に着くことを信じていた。私たちも神の国の永遠の食卓に招かれている。主イエスの肉であるパンと主の血である杯に与る毎に、神が主イエスによって、滅ぶべき私たちを永遠の命に生きる者に変えて下さったことを思い出す。この食卓は神の恵みが溢れる食卓である。赦しの恵みをかみしめながら、主の食卓に招かれ、主の食卓を宣べ伝えていきたい」。

一同感謝のうちに、教団信仰告白を告白し、聖餐に与った。

第二日目 夜 解放劇

「人は変われる」

総会2日目の夜、恒例の解放劇が「人は変われる」と題し上演された。今年は劇のスタイルが大幅に変更され、朗読劇の形での上演となった。ほぼ着席したままで台詞の朗読に集中できるスタイルということもあり、演者の台詞は感情豊かで非常に聞きやすいものであった。台本の土台に、実在する2人の被差別経験者との出会いがあったため、ストーリーにも例年以上の深みやメッセージが感じられた。

劇の中心に取り上げられたのは結婚を目指すチエミとケンイチに降りかかった部落差別問題。被差別部落出身のチエミとの結婚をケンイチの父ハジメに反対されることを、牧師のクリモトに2人で相談するところから劇はスタートした。

楽観的な牧師は、話せば分かってくれると、いつものように聖書を読み、祈りを捧げ若い2人と連れだってハジメの元を訪れる。ここでもいつものように聖書の言葉を引き合いに出し、部落差別による結婚の反対の愚かさを諭していく牧師であった。しかし逆に、差別の現実の厳しさを突きつけられ、「被差別の経験があるのか、被差別経験者との出会いの経験はあるのか、お前には牧師の資格はない」、そんなハジメの勢いに言葉を失ってしまう。

愛しているのなら結婚をあきらめろと、頑なに結婚を反対するハジメの前に言葉を失ったのはケンイチも同じ。しかし、そんな状況でもケンイチと一緒にいることを望むチエミの言葉に彼は奮起する。「変わらなければ…部落差別の実態を知らなければ…」。

この思いは牧師も同じであった。教団の部落解放センターで被差別部落出身のハル婆を紹介された3人は彼女の元へ。そこで彼女の口から語られたのは、小学生時代に経験した壮絶な被差別体験と就職後も続いた出生を知られることに恐れ怯えた日々。しかし、話は彼女の結婚を機に希望に展開していく。

ハル婆の連れ合いの「安心しろ」の一言に被差別からの解放を感じた彼女。連れ合いは彼女に否定的だった自分の家族にも真摯に向き合い、差別の愚かさを説いた。

この話に希望を見出した牧師とケンイチは改めてハジメと向き合うことになる。差別との戦い、助け合い、今まで以上にチエミとの結婚への思いを熱く語るケンイチ。一方牧師も、主イエス・キリストに倣い、小さくされた者との出会いの経験の中で、差別する側が変わらなければならないと言葉を強める。

ここでケンイチの祖母であるマチコ婆が登場。変わる兆しが見えつつあるケンイチと牧師に、彼女の口から、実はハジメも被爆者の子どもという理由での壮絶な被差別の経験者であったこと、被差別経験者ゆえの結婚の反対であったことが明らかになりエンディング。差別される事からの解放と差別する事からの解放の実現を強く願う東谷氏（脚本担当）の言葉で解放劇は締めくくられた。